

研究主題

小学校英語教育で大切にすべきこと
～高学年英語科の在り方～

要約: 小学校の全教育活動と中学校以降の英語教育の中で、小学校英語教育で大切にすべきことは「コミュニケーション能力の基盤づくり」であることが分かった。中学校以降の英語教育での知識・技能の獲得に向けて、高学年英語科で段階的文字指導を導入し問題解決型授業をしていくことは、コミュニケーション能力の基盤の一つである「英語学習に楽しんで取り組もうと思える『感性』『知力』『態度』を育む」ために、有効であることが確かめられた。

キーワード: 小学校英語教育 高学年英語科 段階的文字指導 問題解決型授業

はじめに

文科省の調査によると全国公立小学校の93%以上の小学校で英語教育(活動)が取り入れられている。

しかし、内容・指導法は、石川県内だけを見ても月1回の英語活動から英語科(平成16年度認定『世界都市金沢』小中一貫英語教育)特区)まで多様である。

公立小学校英語導入への疑問の声があがる中、昨春、中教審外国語専門部会が小学校英語教育推進に向けての審議状況をまとめた。今までの各地域や各学校の工夫した取り組みを踏まえ、小学校英語導入の意義について再考する必要がある。

特に、中学年までに音声言語中心の英語活動を経験してきた高学年児童に、中学校外国語科を前にどんな授業を展開すべきか、他教科と同じように「問い」や「気づき」のある学習を展開できないかを実践検証しながら研究を進めたいと考えた。

I 研究の目的

公教育全体、英語教育全体から考えて、小学校英語教育のねらいは何かを明確にし、中学校へつながら高学年英語科の在り方について探ることを目的とする。

II 研究方法

1. 文献・調査等から、小学校英語教育で大切にすべきこと(ねらい・指導法)を明確にする。
2. 特区認定後の小学校英語科の実践・調査等を通して、成果と課題を考える。
3. 学会・研修会・公開研究会への参加、文献研究、諸調査等を通してねらいに迫る指導法を探る。
4. 授業実践(必要に応じて教材作成)から、指導法・授業展開を考察する。

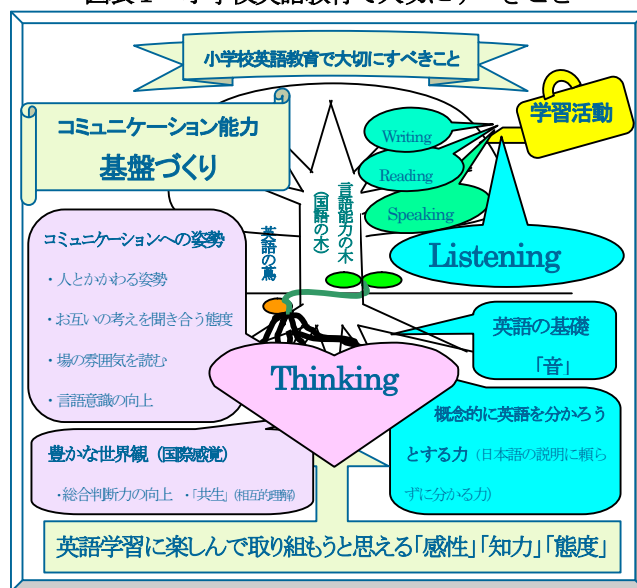
III 小学校英語教育で大切にすべきこと

中学校以降の英語教育を視野に入れ、小学校英語教育では具体的に何を大切にし(どんな環境をつくり)、どんな力を育てるべきかを成長段階に応じてまとめた。その結果、文部科学省がこれまで示してきた通り、小学校英語教育は、「聞く・話す・読む・書く」という四技能や会話技術のスキルの向上を主にねらうのではなく、将来の英語力の向上に繋がるコミュニケーションの基

盤となる学習(適期教育)をすべきことが分かった。

共通言語能力は、Cummins(1984)の「二重氷山のたとえ」では水面下にある。カニングハム久子(1988)は、「日本語で抽象思考を操作する段階になってから英語が入ってきたため、すでに根を張った日本語という木に絡む蔦のように英語が取り込まれた」と述べている。また、久埜(2006)は、英語習得には4技能に加えて「+thinking」が必要だとした。これらをふまえて、図表1の小学校英語教育イメージ図を作成した。

図表1 小学校英語教育で大切にすべきこと



IV 小学校英語科の実際

小学校英語科は、全国的に試行段階である。特区金沢市立小学校児童が英語科で身に付けたスキル及びコミュニケーションやスキルへの意識・意欲から実態を掴むことを試みた。

1. ノート指導初期におけるノート分析

6年児童(昨年度担任)英語ノートから単語・文の書き方の指導観点別に定着率を分析した。添削観点は、「文は大文字で書き始める」等、副読本・教科書を参考に11項目である。結果から、音声で十分経験した基本表現は文表記においても語順定着率が高いことが分かった。また、ローマ字指導等国語科と関連を図る必要性も感じた。

2. 文字認識力調査

図表2は、3年～6年生児童477名に単語選択問題を実施した結果である。平均値は3年～4年生間の伸びが大きい。4年生でローマ字及び小文字を学習することが主な要因であろう。しかし、文字認識にはローマ字の影響よりも、学習環境の中で触れた経験の影響が

図表2 単語選択問題結果 (30題)

	人数	平均値	伸び	標準偏差
3年	131	11.87	7.39	5.66
4年	108	19.26	1.84	7.88
5年	106	21.10	3.22	6.88
6年	132	24.32		5.87
total	477	19.14		8.10

文字認識力の個人差を小さくすると考えられる。

3. 小学校英語にかかわる中学生の意識比較調査

金沢市立中学校 (年間35時間以上小学校英語学習経験者555人) と他郡市中学校 (年間10時間前後英語活動経験者762人) で6月中旬に実施し、比較・考察を進めた。

注: 両校は、時数以外に指導者や内容・指導法にも相違がある。また、小学校英語科経験者は金沢市立中学校の1・2年生だけである。そこで、英語科経験者と英語活動経験者の比較の際には、両校の3年生を対象から外して比較・考察を進めた。両グループの差の検定にはウィルコクソン (Wilcoxon) の順位和検定を行った。p<.01のとき「**」印をつけ、p<.05のとき、「*」の印をつけた。相関係数の検定については、正の相関の有無を検定した。

(1) 「コミュニケーション能力の基盤づくり」について

図表3 「コミュニケーション能力の基盤」に関する結果

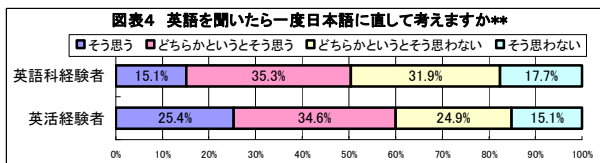
	両校肯定回答割合		学年差
	3年生差	1・2年生差	
人とかかわる意欲	-1.0%	2.3%	3.3%
お互いの考えを聞き合う意識	-2.4%	-4.1%*	-1.7%
相手や周りへの思いやり	-4.6%*	-9.6%**	-5.0%
場や相手に応じた言葉遣い	-5.3%**	-8.7%**	-3.4%
日本文化・言語への興味・関心	-11.6%**	-4.8%*	6.8%
外国文化・言語への興味・関心	-6.2%	-2.9%	3.3%
外国の人とかかわる意欲	-2.1%	-5.6%	-3.5%
考えを比べて判断する意識	-4.6%	-10.6%**	-6.0%
場にある正しい判断する意識	-2.0%	-7.1%**	-5.1%

注: 両校差=市立中学校肯定回答割合-他郡市中学校肯定回答割合 学年差=両校1・2年割合差-両校3年割合差

図表3に示した通り、他郡市中学校がほとんどの項目で肯定回答割合が高かった。「コミュニケーションへの姿勢」及び「豊かな世界観」の育成には多くの要因が含まれており、小学校英語だけで担うのは難しいことが分かった。

しかし、1・2年生(英語科経験者)が3年生に比べ他郡市中学生との差が小さい項目がある。小学校英語科が「人とかかわる意欲」や「日本文化・言語や外国文化・言語への興味・関心」を高める可能性は示唆された。

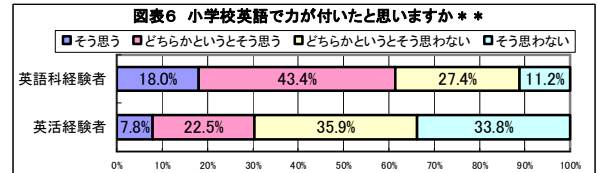
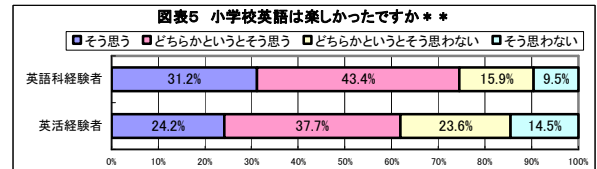
「概念的に英語をわかっていく力」についても、図表4に示す通り英語科経験者が高い傾向が伺える。



「読むこと」「書くこと」への意欲も、英語科経験者が英語活動経験者よりも高い傾向にあった。

(2) 「小学校英語」について

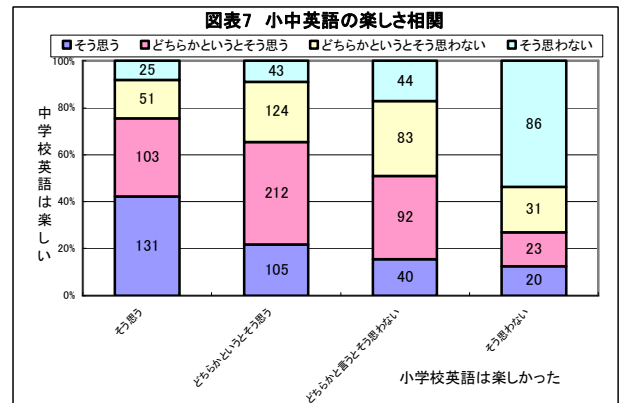
図表5及び6に示す通り、英語科経験者は、英語活動経験者よりも小学校英語を「楽しかった」「力が付いた」と認識していることが明らかになった。英語科経験者は「ついた力」として、四技能だけでなく「(日本語を)聞く力」も多く多くの生徒が挙げていた。



小学校で不十分だった活動として、「書く活動(634人)」「覚える活動(523人)」「単語や文の発音練習(471人)」「読む活動(411人)」が多く挙げられた。

(3) その他

図表7から小学校英語が楽しくなければ中学校の英語学習も楽しく取り組めない可能性が高いことが分かった。小学校英語でも「覚えること」「書くこと」(中学生が戸惑ったこととして挙げた項目)を加味した楽しい授業を工夫する必要がある。



アンケート項目相互の相関関係から以下が考察できた。

- ・「外国や外国の文化」「外国の方とのふれあい」に関心や意欲の高い生徒は、「英語学習に楽しく」取り組むことができ、四技能への意欲が高い傾向がある。
- ・「英語学習が楽しい」生徒や「英語学習が大切」という意識の生徒は、四技能への意欲が高い傾向がある。
- ・四技能は、相互に正の相関関係が強い傾向がある。

V 高学年英語科の在り方

1. 中学校以降の英語教育との関連

中学校の学習内容・指導方法を単に小学校におろすのではない。小学校英語教育で、児童の柔軟な適応力を生かした「コミュニケーション能力の基盤づくり」をすることが、義務教育終了時の姿をより豊かにすると考える。音声言語中心の学習経験で培った力を、中学校英語でさらに伸ばすための課題は、高学年英語科における「スキル」の扱いである。「スキル」を「知識・技能」と捉え文字指導と授業展開に着目し、高学年英語科で「英語学習に楽しく取り組もうと思える『感性』『知力』『態度』の育成」を図ることとした。

2. 「段階的・文字指導」について

茨山(2000)は、「文字学習は児童にとって負担が大きく、英語嫌いに結びつく恐れがあるから公立小学校は文字指導を行わないとしている学校が多いが、児童の負担を増した原因の大半は導入ではなく指導のあり方にある。」と

言う。直山(2001)も、「小学校高学年の英語学習には系統だった文字の読み指導が必要。小学校高学年児童の興味や発達の程度から考えて、文字に親しみ、音と文字との関係に気づいて、自分で簡単な単語が読めるようになる過程を小学校高学年の時期にしておくことは、中学校英語との連携から考えても大切。」と述べている。

中学校で本格的に始まる「読む」「書く」の基盤として、小学校では、音声を蘇らせる記号として文字を用いながら音と文字との関係に自ら気づくような段階的の文字指導が必要と考え、授業実践Ⅰに取り組んだ。

3. 「授業展開」について

高学年への指導法についての悩みは多い。好奇心いっぱいにくっつくなく学習活動に取り組んできた中学年までとは違う高学年の成長段階にあった英語学習が必要になる。久埜(2001)の言うように、高学年は背伸びしてでも知識を獲得していきたい年齢である。中学生のアンケートにも、小学校から「覚える」学習活動を組むべきだという意見が多かった。知的満足・積み重ねの実感のある学習を求めていると言える。

高学年英語科で、他教科のような問題解決型授業展開を工夫し主体的に言葉を獲得していく学び方を身に付けることが必要と考え、授業実践Ⅱに取り組んだ。

Ⅵ 授業実践Ⅰ～段階的の文字指導の工夫～

小学校では、自然な言語習得の流れに沿い、「書くこと」よりも「読むこと」を優先し、音声言語と一緒に文字がある学習に無理なく取り組むことにした。

1. 5年生「アルファベットの秘密」

ねらいは、文字への興味・関心を高めることである。低学年から親しんできたアルファベット文字が古代エジプトの象形文字（5年国語科で既習）であることを知り、各自の選んだアルファベット文字の由来を考える授業を行った。パソコンルームでパソコン画面に絵や文で書いた各自の考えを全員で交流した後、パワーポイントで作成した教材で正解を見た。

児童は、掲示やパソコン画面のヒントを見ながら古代エジプトの人々の生活に思いを馳せ、由来を考えることに楽しんで取り組んでいた。感想にも「アルファベットの元の形を考えるのがおもしろかった。」「考えることがおもしろかった。」と知的満足が表れていた。

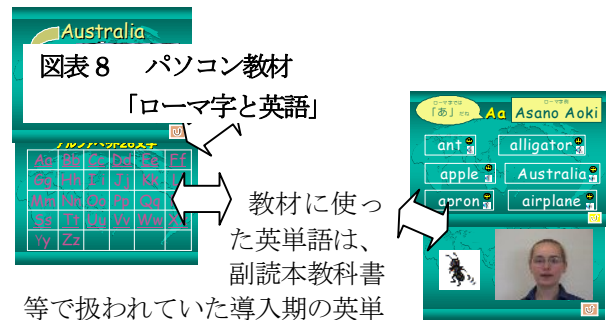
授業後のアンケートで、94%以上の児童が「これからはアルファベットを使っていきたい。」と答えたことは成果である。さらに、来校した留学生が授業に特別に参加したクラスは100%だったことから、英語の必要感が意欲につながるということが明確になった。

2. 6年生「ローマ字とアルファベット」

児童は、英語特区指導計画に沿い中学校英語科教科書を用い、読んだり写したりしている。しかし、授業前アンケートでは、「読むこと」への意欲が4技能の中で一番低かった。児童の90%以上が「ローマ字学習が英語学習に役立つ」と考えており、ローマ字読みを楽しんでいる様子も伺えたが、やはりローマ字と英語が混乱している児童もいた。

そこで、アルファベット表記によるローマ字（日本語）と英語の音の違いを意識化することで文字言語意識を高め「読むこと」への意欲を高めるために図表8

のようなパソコン教材を作成し、授業実践を試みた。



図表8 パソコン教材

「ローマ字と英語」

教材に使った英単語は、副読本教科書

等で扱われていた導入期の英単語

135語である。児童にとって馴染みがある単語の中からローマ字と英語のアルファベット表記の違いへの「気づき」を促すことができる単語を選んだ。個に応じて楽しく使えるように以下の工夫も加えた。

- ・好きなアルファベットからチャレンジ可能。
- ・単語を音だけで読むか、映像とイラストのページまで進めて読むか選択可能。
- ・複数のネイティブスピーカーの発音視聴可能。

児童は意欲的に学習問題に取り組み、それぞれの「気づき」を交流し合うことができた。授業後のアンケートでは92%の児童が「読むこと」に意欲的な回答をした。授業前と比較し20%の増加がみられた。さらに、授業をきっかけに英語学習に自主的に取り組む児童が増えたという学級担任からの報告もあった。

Ⅶ 授業実践Ⅱ～授業展開の工夫～

1. 英語学習に楽しんで取り組もうとする

『感性』『知力』『態度』を育てるために

(1) 『感性』を育てるために

各時間の基本表現を使う本当のコミュニケーションを生み出す場面づくりを大切にしたい。児童各自が自分の「+thinking」を持ち、「聴きたくなる！言いたくなる！読みたくなる！書きたくなる！」場面を工夫した。児童が知的興味を示す題材について必要感や意欲の持てる活動を組み、その結果、児童が達成感を味わったり、意外な発見があるようにしたりした。単元最後には発展学習としてゲストを招いたグループワーク（単元計画内 World Time）を位置付けた。このようなコミュニケーションの楽しさや学ぶ楽しさの体感を通して『感性』の育成を図った。



(2) 『知力』を育てるために

低学年から積み重ねてきた英語の音の基盤に自ら学び自ら考える力を加え、自分の学びや学び方をふりかえるために、媒体として文字を用いた。例えば、品詞別色単語カードを並べ換え、文を組み立てる経験を通して語順への「気づき」を促したり、学習プリントに文字を活用したりした。



また、学習に見通しを持てるようにする等、受身の学習から主体的な学習に変えるために問題解決型授業を展開することで『知力』の育成を図った。

(3) 『態度』を育てるために

英語学習は、根気強い継続的な取り組みが必要であ



る。そこで、家庭学習と ST 授業（学級担任だけの 15 分授業）で活用する音読教材を作成した。副読本の基本表現を場面ごとに再編成した英文カードと英語講師の協力を得た音声教材である。加えて、ノート指導、プリント宿題を通して『態度』の育成を図った。

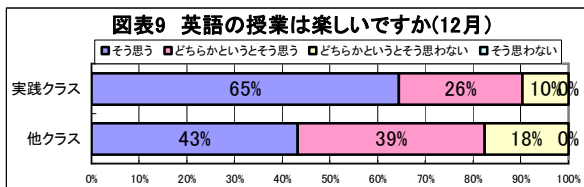
2. 単元計画

教材は、中学 1 年生教科書である。その単元で扱う文法的要素に着目し単元計画を立てた。TT 授業と ST 授業を組み合わせるに迫り、単元後に体験的発展学習 (World Time) を組み込んだ。

次	時間	ねらい	主な学習活動
一 次	1時 TT	一般動詞	先生の質問に答えよう。
	2時 ST	肯定文	誰の自己紹介か考えよう。
	3時 TT	一般動詞	仲間探しをしよう。
	4時 ST	疑問文	友達の持ち物を考えよう。
	5時 TT	一般動詞	遠足のおやつを考えよう。
	6時 ST	否定文	6の 3PIZZA をつくろう。
	7時 TT	前置詞句	旅行計画を立てよう。
二 次	1時 ST	復習	怪文を解決しよう。
	2時 TT	復習	“Who am I?” Quiz を作ろう。
発 展	1時 ST	発展	伝えたいことを考えよう。
	2時 TT	発展(活用)	World Time (グループワーク)

3. 結果と考察

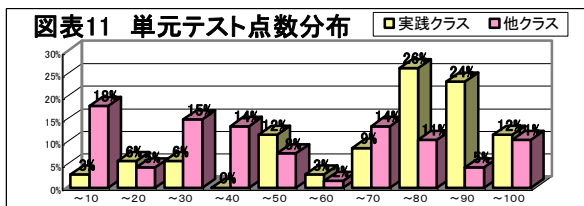
「英語はいろいろな人に質問すれば様々な答えが返ってきておもしろい。」「自分のことを聞いてもらえて、質問してもらったりして、興味を持ってもらえたと思うととても嬉しかったです。」等、各時間や World Time の感想にコミュニケーションを楽しんでいる様子が表れていた。さらに、図表 9 に示す通り、「英語の授業が楽しい」と答えた児童の割合は、他クラスと比較しても高かった。



理由として「わかりやすい」「わかる」「読めた」「話せた」という「スキル (知識・技能)」の獲得を挙げた児童がほとんどであった。授業のふりかえりに「英語は単語の順番が大事」等の「気づき」を書く児童も毎時間増えていった。そこで、単元末テスト結果を他クラスと比較し図表 10・11 に示した。

図表 10 単元末テスト結果 *通過率・準正答含む

	平均点	通過率	全問記入者%
実践クラス	68.8	78.8%	76.5%
他クラス	47.6	54.2%	48.5%



実践クラスは、平均点・通過率とも他クラスよりも高かった。理由として、実践クラスは全問記入者の割合が他クラスより高いことが考えられた。逆に他クラスは、未記入問題のある児童の割合が高く、単元テ

ト点数分布頻度最高値も 0~10 点間 (18%) である。未記入の理由として、理解の難しさだけでなく意欲の減退が危惧された。そこで、授業実践クラス使用教材を他クラスで活用しながら復習することで、一人ひとりの理解を促し意欲につながるようにした。

また、単元前後の自己紹介の内容も豊かになっていた。ビデオ分析をした結果、平均自己紹介文数は、3.59 文から 6.82 文と増えていた。実際に英語でのふれあいを体験した World Time の感想にも「自己紹介ができてよかったです。いろいろ質問もできてよかったです。二人目のゲストの時は、少しずらずらに言えたのでよかったです。いつもより英語が言えたのでよかったです。」と、できるようになった達成感や自分の伸びの自覚が表れていた。加えて、ゲストの ALT (児童が進学する中学校) や低学年時の英語講師に英語でふれあいができたことを褒められたことも自信や意欲につながっていた。

このような「スキル」の獲得は、英語学習への意欲にもつながったようだ。図表 12 のように、7 月と 12 月 (授業実践前後) 実施の意識調査の比較によって、4 技能への意欲の向上が見られたのである。

図表 12 英語技能への意欲肯定回答割合

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
7 月	71.4%	74.3%	65.7%	74.3%
12 月	93.5%	100%	84.5%	90.3%

中学校英語学習への意識・意欲にも変化が見られた。中学校への心配が軽減されただけでなく、中学校での技能獲得への意欲に対しても、全員が肯定回答を示した。「中学校でもっと英語を覚えたいですか」という問いにはほとんどの児童が積極的肯定意見だった。

単元の学習内容以外の成果もあった。家庭学習 (音読カードと音声教材の音読教材活用・毎日継続) が学習に役立ったと答えた児童は 100% であった。授業前後のインタビューテストでその成果が表れた。正確性の向上だけでなく、即応性の向上も見られたのである。児童も「前よりもずらずら答えられて嬉しかった。」と感想を話していた。

また、未習単語・文を含む文字認識調査においても他クラスより正答率が高かった。音読の取り組みは、既習単語・文への定着を図るだけでなく、文字認識力を高めることに効果があったと考えられる。

VIII 結論と今後の課題

「コミュニケーション能力の基盤づくり」として、高学年英語科で児童の実態に応じて段階的に文字指導を導入し問題解決型授業をしていくことが「英語学習に楽しんで取り組もうと思える『感性』『知力』『態度』を育む」ために有効であることが確かめられた。

「コミュニケーション能力の基盤」をつくる小学校英語科の評価の在り方については、今後も実践の中で考えていかねばならない課題である。